会員だより

ポナペ島の旅から

—ナン・マドール遺跡—

富山県農村医学研究会　越山健二

昭和62年2月の中旬，トラック慰霊の行事を終了してからポナペ島をたずねた。この島は東京の南東3900キロ離れた淡路島の3分の2程度の小さな常夏の島で，人口，2万3千人太平洋戦争当時は1万3，4千人の陸海軍将兵が駐屯し戦斗が行われた処で，今日尚当時の思い出を持つ人も多いと思われる。

マングローブに囲まれた水路の小島

いま島は平和で静かなくらしが行われ，地球最後の楽園とも形容され，ミクロネシアの花園，遺跡の島ともいわれている。僅か2日間の滞在であったが，色鮮かな大小さまざまの花が咲き乱れ，ふくよかな花の香が島全体にたゞようているように感じた。トラック島から小型機で約1時間でポナペ国際空港に到着，国際空港とはいえ，空港ターミナルは椰子の葉で葺いた丸太造りの質素な掘っ建て小屋のようで吹きさらしの中で係員が1夜の出入国の手続を行い，窓枠の上に民芸品を並べ販売しており，ターミナル周辺に数十名の老若男女が，色鮮かな衣をまとい，好奇の眼をかゞやかせ物珍らしく旅行者をみつめていた。なかには貝殻で造ったネックレースや頭に生花の輪（マルマラ）をつけた人も目につく。衣，食，住，すべては簡素で，私共の生活水準からみれば甚だ低いもののようであり，これからの改善，開発が原住民の願望でもあり，

ポナペ空港手作りの民芸品が並ぶ

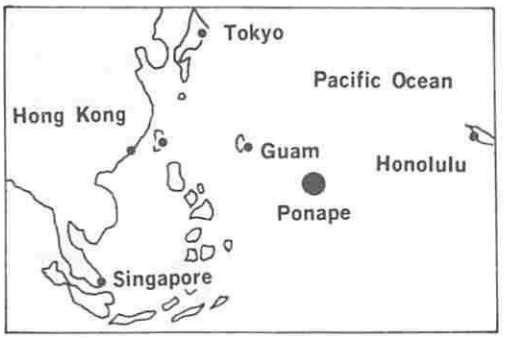
のぞましいことと思われた。

しかしそこには私共が既に失ったと思われる本当のものがあったようにも思われた。本物の空といえる空があり，海があり，空気や水や，本物の色が，音や味が，あったように思った。燦燦（さんさん）とした陽光，風にそよぐ椰子の葉音，突然の雷雨，島は深い緑で覆われ，外周は南国特有のマングローブの繁みで囲まれ，常夏の気温の中で草木は新鮮な輝があった。食卓には本物のエビやカニが無造作に並び，果物も豊富で本物だと感じた。

この島の中心部であるコロニアの波止場から，モーターボートで40～50分，叩きつけるようなスコールを浴びる事30分，この島で有名

ナン・マドール遺跡

ナン・マドール遺跡



Ponape の位置

Ponape 島

なナン・マドール遺跡に到着した。入りくんだ水路を抜け3平方キロに及ぶ長方形の区画に大小50の石造建築が集合したもので，玄武岩から成る巨大な長石や板状石（鉱物学で柱状節理，板状節理と呼ぶ）が巧みに縦横に積みあげられ（写真）構造はどれも同じであるという。たくさんの水路，運河が構築され，石造の溝や階段など土台の石は重さ数トン，積み上げられた石材は数千万本にも及ぶという。この古代遺跡群は11世紀頃までこの地を支配していたというサオデルール王朝の墓所とも伝えられているがこの遺跡が如何にして，何の目的で，何時誰が造ったのか，その実体は未だ不明で神秘の謎とされ，サオデルール王朝の宮殿跡であろうともいわれている。

高度の科学性にもとずいた技術，技能を駆使しなければ建築不能と思われる遺跡が現存している事に驚かされるのである。私は先年メキシコのテオテイワカンやペルーのクスコに於ても壮大な石造建築物を見聞した。それは今なお神秘とされるマヤ文明やインカ文明の高度の技能であり，現地の博物館で直接目にふれた陶器や織物，生活道具などたくましい創造力にもとづくものであった。

ナン・マドール遺跡はこれ等マヤ文化やインカ文化等古代未知の文化と軌を一にするものと思われるが，その創造主はインディオである。今日はインデオはその子孫の顔貌，体型は私共東洋人に似ており，乳幼児に認められるモーコ斑の存在などからみても共通しておりアジア民族系であるとされている。

そんな事を思うときこれらの遺跡は東洋系の民族が創造したものであり，何か身近な思いもしてくるのであった。人間の自由でたくましい創造性と行動に驚くと共に，生命の無限の可能性を思うのである。

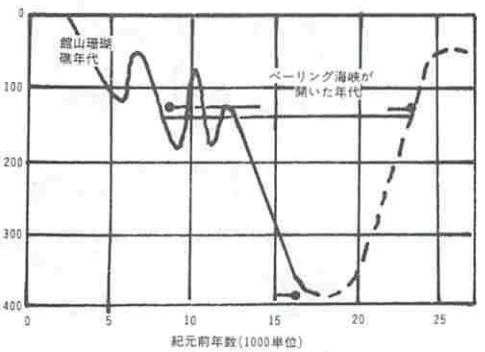
私たちを案内してくれた若い水夫は，この遺跡は，私の祖父の，そのまた祖父の，ずーと前の祖父たちが造ったものだと誇らしげに話した。彼は日本語が少しわかるというのでパートで案内を引き受け平常は理髪士の免許で仕事をしているが，お客が少なく実入も少ないので外へ旅をしたいのだが残念ながら出来ないと嘆いていたのが印象に残った。

南北アメリカや太平洋の島々は，1492年コロンブスの発見以来新大陸としてポルトガル，スペイン，フランス，ドイツ，日本等によって統治，開拓され，原住民はインディオと呼ばれ奴隷の取扱を受けた経過もあり開放された後日もなお民族差別の傾向も強いようだ。

人間の発現は150万年以前で，その歴史は悠久の昔である。インディアンの移動は何時頃から始ったのか。地学，海洋，天文学等からの解明から中央アジアの人種がベーリング海峡が陸続きの時代に大移動が行われるとの推

後氷期の気候

ウルム氷期の氷の面積（ホプキンス）



海水面降下（現在と比較，フート単位）

測がなされている。(図参照) 長い年月の間に人間も変異し，多くの種属が発生したが，ベーリング海峡を乗り越えてアラスカ，アンデス山脈に沿ってトナカイを追う狩猟民族として南下し北アメリカ，中部アメリカ，南アメリカ，更には太平洋の島々へ移動し，巨大な文明を残したのである。

私共はいま先進国の一員として物質文明の真中にあり，豊かなくらしを享受しているが激動，激変の時代の中で，私共を育む環境は大きく変化し，それにつれて身体も心も変った。空気，水，土壌など汚染がすゝみ本物が少なくなりつゝあり，物質文明の中で身体が衰弱しはじめ，利得行動，利己中心は精神の不健康を加速したようにも思われる。私共が心身につけた文明の垢はますます厚くなるような気もする。

ポナペ島にも，そろそろインスタント食品等の排棄物が海辺などでみられた。物質文明の進展と観光客の増加は汚染の島への移行が気にかかる。地球の最後の楽園は21世紀までもたないような気もするのである。

ナン・マドール遺跡は祖先アジア民族の壮大な贈り物である。私共が後世に残すものは何であろうかと考えさせられる旅であった。